



国産への プレミアム感薄まる 20歳代の

3人に1人が朝食抜き

—消費者動向調査(2019年7月調査)—

消費者の食の志向はどのように変化しているのか、最近の食料・農業をめぐる情勢の変化の中で消費者の食料・農業に対する意識・意向はどうなっているのか調べました。

六〇、四〇歳代が四六・四％と各世代の約半数を占める結果となりました。

「簡便化志向」は単身世帯や就労する女性の増加、ライフスタイルの多様化などに伴って、二〇歳代〜五〇歳代の働く世代での高まりが見てとれます。「手作り志向」の高い六〇歳代と七〇歳代では、「簡便化志向」は低い傾向が見られました。

「国産志向」は年齢が上がるにつれて高くなる傾向にあり、二〇歳代と七〇歳代では約三倍の開きがあります。

国産食品と輸入食品について

輸入食品への不安感薄まる

次に国産食品と輸入食品のイメージについて聞きました。

国産食品では「価格が高い」が六四・五％と、前回調査からは▲〇・一ポイントと同水準ながらも二〇〇八年の調査開始以降で最も低い値となりました(図3)。このことから国産食品の「価格が高い」というイメージは、薄れてきていることがうかがえます。「安全性に問題がある」イメージは二・七％と引き続き低い水準を維持しています。

輸入食品では「安全面に問題がある」が、八半期連続で低下し前回

調査から▲一・七ポイントの三五・三％となりました。この数値は、調査開始以降で最も低い値です。輸入食品の安全性のマイナスイメージは緩和傾向にあります。

輸入食品と比べ、どのくらいの価格レベルまでなら国産食品を選ぶか、いわゆる価格許容度を聞いたところ、「割高でも国産品を選ぶ」は五七・九％でした(図4)。過半を維持しているものの、緩やかな低下傾向にあります。

一方で、「国産品へのこだわりがない」は、一六・〇％と「割高でも国産品を選ぶ」と比べて少ないものの、その割合は緩やかな上昇傾向にあります。

食生活の実態について

「おうちのもの」に関心

「食べること」への関心度を聞いたところ、全体で「大いに関心がある」は二二・一％となり、「関心がある」の三二・一％、「やや関心がある」の二四・三％も含めて「関心がある」と回答した人は、二〇一六年調査(以下、一六年調査)から▲五・七の七六・五％という結果となりました(図5)。数値は低下したものの、消費者の「食べること」への関心は引き続き高いことが分かりました。

消費者の食や農業に関する意識・意向を把握するため、日本公庫では、毎年二回、消費者動向調査を実施しています。

今回調査では、毎回実施する「食に関する志向」のほか、日本の食生活において、食の外部的・簡便化、米の消費減少などのさまざまな変化がある中で、今後見込まれる国内の「食」のニーズを捉えるため、「食生活」について調査しました。

食に関する志向

「健康志向」は高齢世代

食に関する志向は、引き続き「健康志向」を筆頭に「経済性志向」「簡便化志向」が三大志向となりまし

た(図1)。

「健康志向」は上昇傾向にありましたが今回の調査では低下に転じ、今年一月調査(以下、前回調査)から▲二・八ポイントの四三・八％となっています。

一方、「経済性志向」「簡便化志向」は続伸し、三八・一％、三三・四％となりました。

なお「国産志向」は前回調査より▲一・三ポイントの二四・三％と過去最低の数値となっています。

年代別に見ると「健康志向」は六〇歳代〜七〇歳代の割合が顕著に高く、特に七〇歳代は六六・一％で三人に二人が重視している結果となりました(図2)。

「経済性志向」は二〇歳代が五〇・

I 食に関する志向

図1 現在の食の志向(上位)の推移/2つまで回答

■ 2017/7 ■ 2018/1 ■ 2018/7 ■ 2019/1 ■ 2019/7

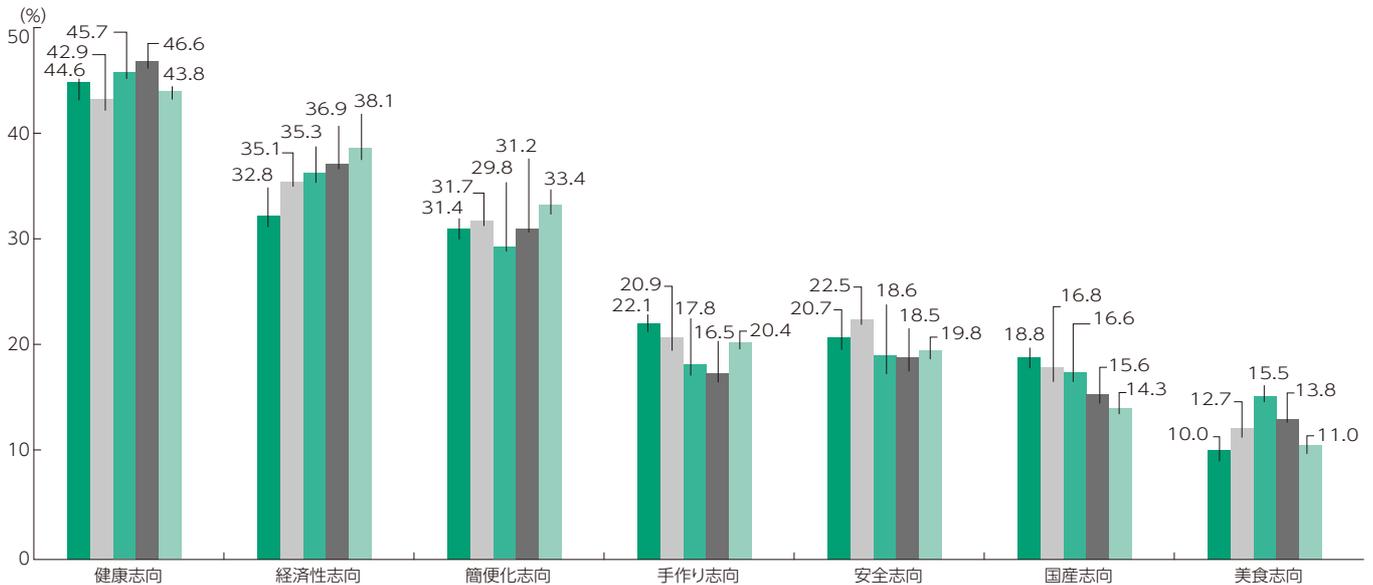
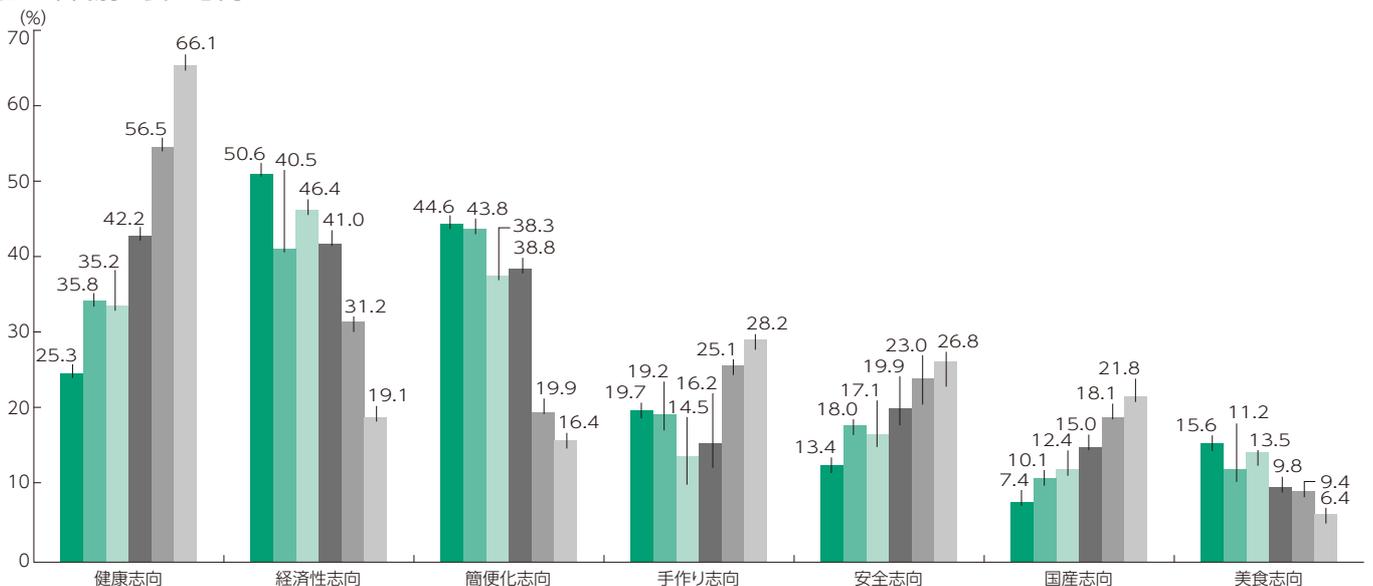


図2 年代別の食の志向

■ 20歳代 ■ 30歳代 ■ 40歳代 ■ 50歳代 ■ 60歳代 ■ 70歳代



年代別に見ると、「関心がある」とした回答は年代が上がるにつれて高くなっています。一番低い値は二〇歳代の六六・五%で、一番高い値は七〇歳代の八九・九%でした。

「関心がある」項目は、全体の六六・八%が「おいしいものを食べる」としており、一六年調査の五六・九%から約一〇ポイント増加しています。

また、若い世代ほど「おいしいものを食べる」「おなか一杯になること」の割合が高く、高齢世代ほど「栄養成分、機能成分」いろいろな種類・味のものを食べること、「人と一緒に食べること」への関心が高くなる結果となりました。

一日三食が大多数

一日の実際の食事回数について聞いたところ、一六年調査同様、全ての世代で「朝昼晩三回」が一番高い数値となりました(図6)。

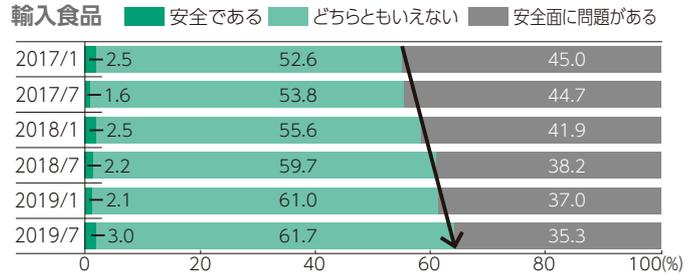
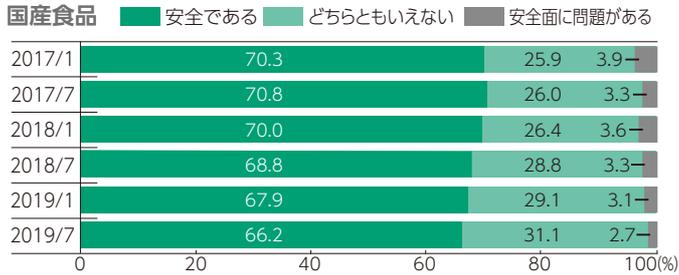
しかしながら一六年調査と比較すると、「朝昼晩三回」と回答した者は全体では▲三・五ポイントの七一・九%、年代別でも全世代で減少しています。

一方、「朝昼晩三回」「四回以上」以外の者(三食食べない者)の中では、朝食を食べない者が多いことが分かりました。特に、二〇歳代は三四・

Ⅱ 国産食品と輸入食品について

図3 国産原料の食品／輸入食品に対するイメージ

安全面



価格

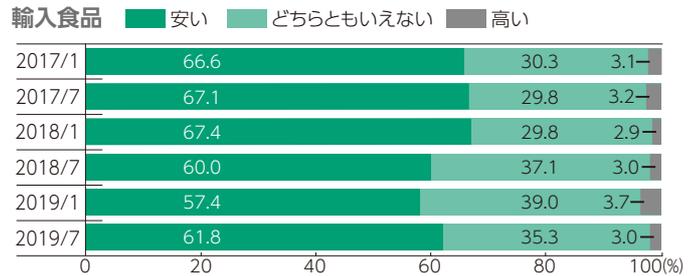
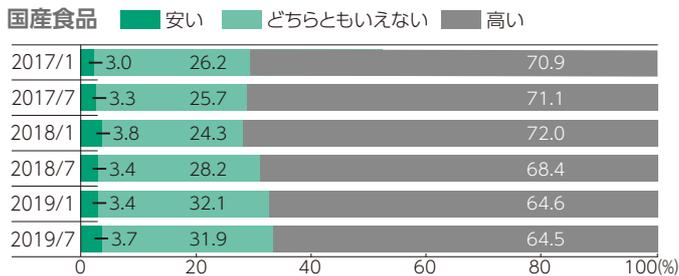
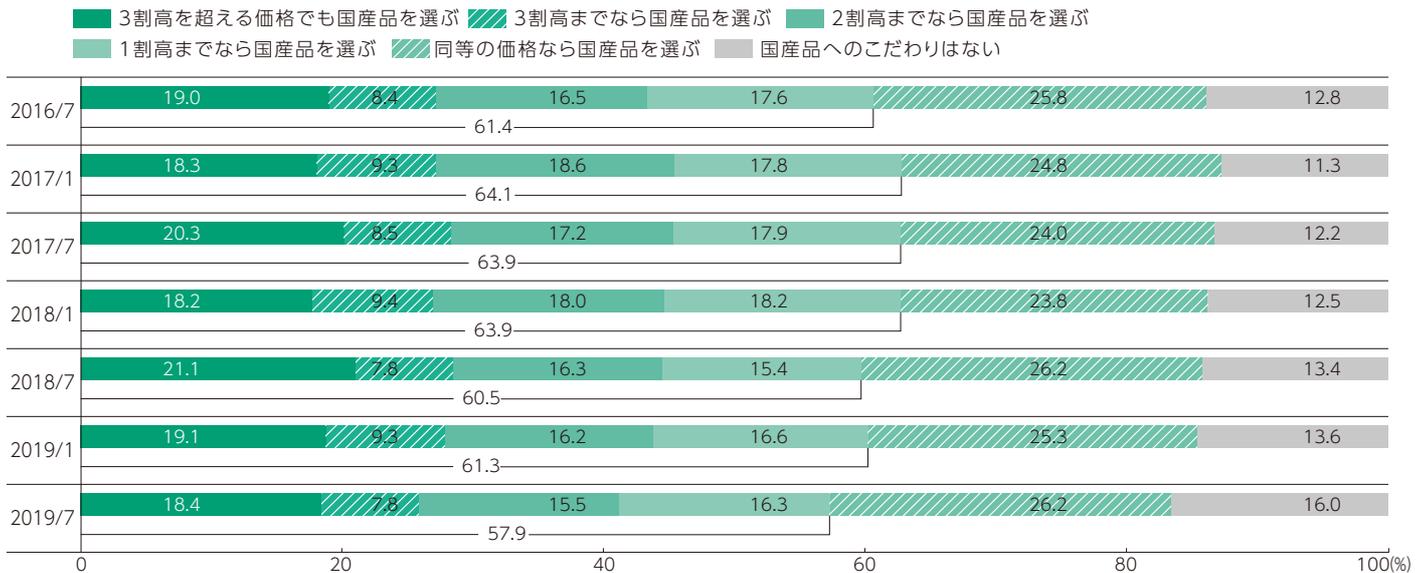


図4 国産食品の輸入食品に対する価格許容度



年代別に見ると、高齢世代ほど朝食にパンを食べる割合が高くなり、若い世代はご飯の割合が高くなる結果となりました。

また、「主菜」については、二〇歳代～四〇歳代の約三割が朝食で主菜を「摂っていない」と回答しています。それに対して高齢世代ほど「主菜」「主食・主菜・副菜以外のもの」を「摂っていない」と回答する割合が少なくなっています。具体的には、六〇歳代、七〇歳代の約二七％が「主菜」のうち鶏卵を摂っており、「主食・主菜・副菜以外のもの」のうち乳製品や牛乳を摂っている割合も高くなっています。高齢世代ほど

高齢世代はバラエティー富む

普段の朝食について、主によいようなものを食べているか、「主食」「主菜」「主食・主菜・副菜以外のもの」に分けて聞いたところ、主食では「ご飯」が五二・九％、「パン」が三一・四％と、この二品目が引き続き中心であるという結果になりました。

食への関心度の低下とともに食事を取る回数自体も減っている様子がうかがえます。

一％が朝食を食べないと回答しています。これは三人に一人が朝食を食べていないこととなります。

Ⅲ 食生活の実態

図7 朝食で主に摂っているもの

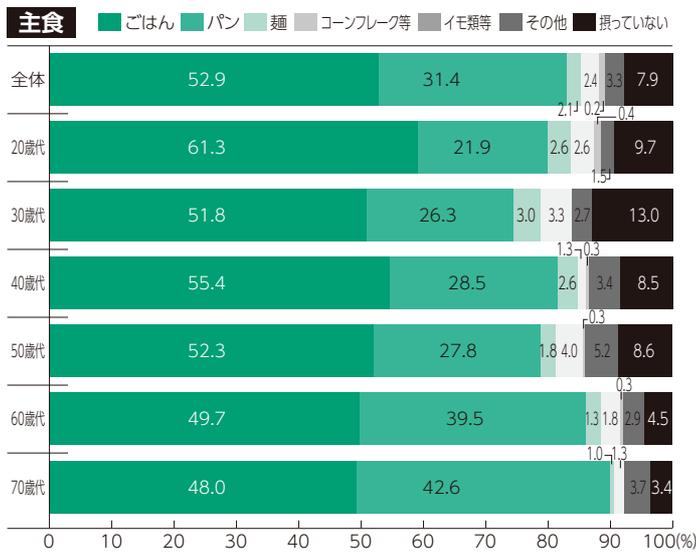
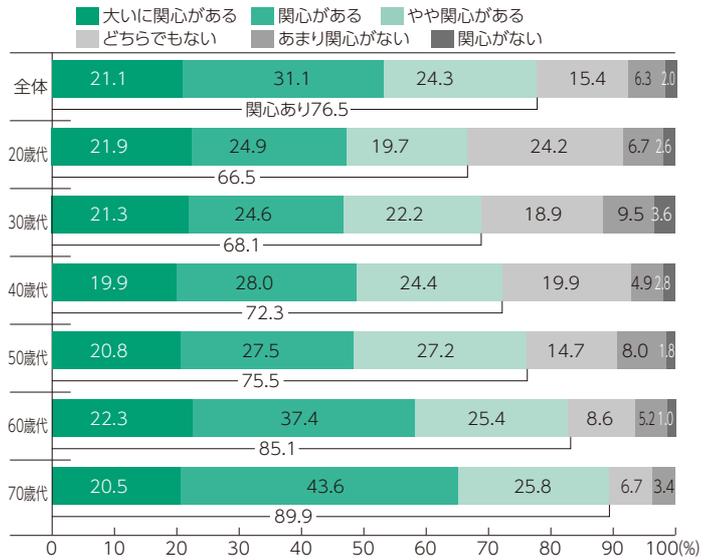


図5 「食べること」への関心度



主食

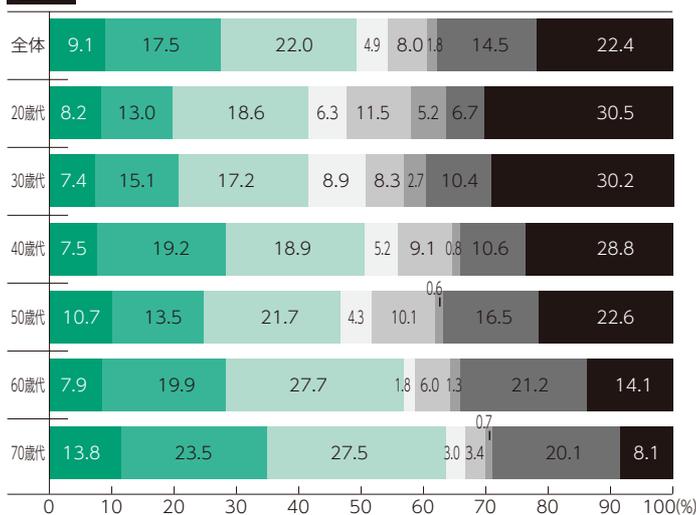
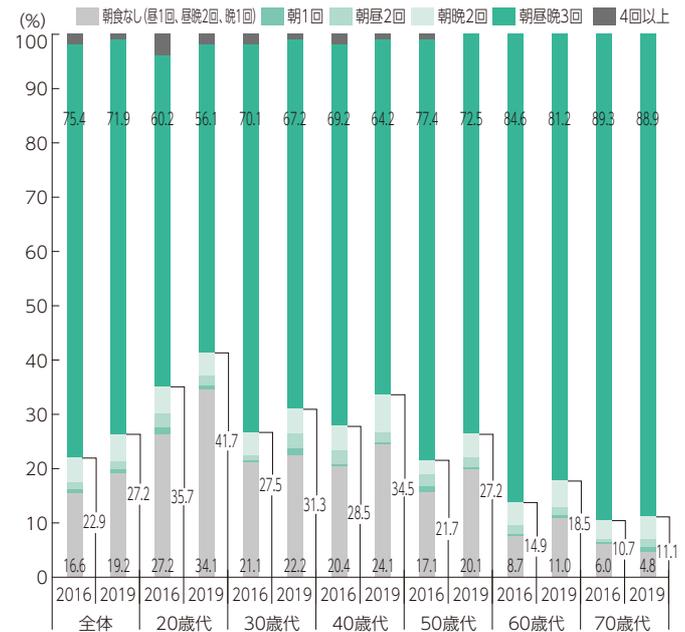
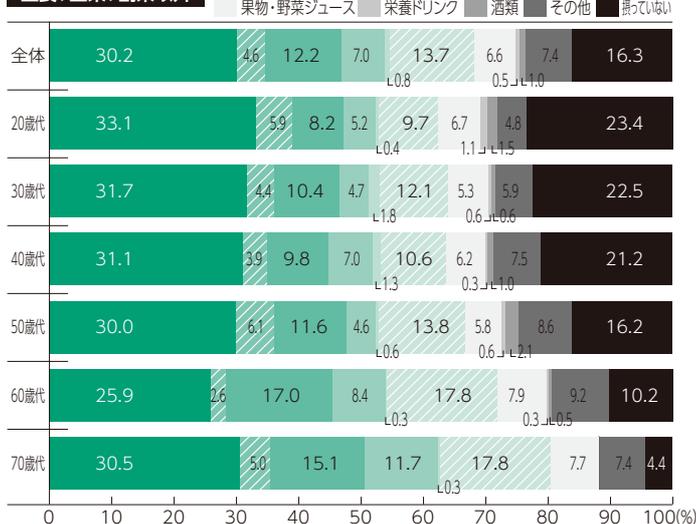


図6 食事の回数について



主食、主菜、副菜以外



バラエティーに富んだ食事をして
いることが伺えます。
結果の詳細は日本公庫ホーム
ページに掲載をしています。
(<http://www.jfc.go.jp/n/findings/investigate.html#sec04>)
【調査概要】
(情報企画部 工藤真依)
● 調査対象：全国の二〇歳代～七〇歳代の男女二〇〇〇人(男女各一〇〇〇人)
● 実施時期：二〇一九年七月
● 調査方法：インターネットによるアンケート
注1：本文中の▲は、マイナスを示します。
注2：図は四捨五入の関係上、合計が一〇〇%にならない場合があります。